
日給 3 万円

長月 タ子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

日給3万円

【Nコード】

N0225A

【作者名】

長月 夕子

【あらすじ】

日給3万円の仕事を見つけた僕、その仕事とは。

「イトーヨーカドーの靴売り場で、店員に36号くださいといってください。このメモはすぐに燃やしてください」

メモにはそう記されていた。僕はそれを読み終わるとすぐにライターで燃やした。メモは灰となって消えた。この仕事はそんなに難しい事は要求されない、と説明された。メモのとおりに動けばまず70%は成功だそうだ。僕は買い物客にまぎれて、夕方の賑わいを見せるイトーヨーカドーに足を踏み入れた。店の奥にある靴売り場には運良くお客らしい姿はなく、品のよさそうな中年の女の店員が棚に並んでいる靴の位置を整えたりしている。僕は何気なく靴売り場に入り、その店員に近づいた。

「あの……」

「はい、何かお探ですか？」

女は満面の笑顔で振り向いた。僕は一瞬躊躇した。僕のやろうとしてる事は何となく場違いなのではないかと。しかし、3万円だ。僕はためらいを打ち消した。

「36号ください」

女が目がきらりと怪しく光った。笑顔という笑顔が跡形もなく消え、そこには何も残らなかった。女はちよつと目を動かすと踵を返して歩き出した。ついて来いということか。僕は黙って女の後を追った。女は紳士靴の棚の上から3番目の靴にそつと手をかけた。すると棚が右にスライドし、真つ暗な空間がぼつかりと口をあけた。女は振り返って僕を見るとその闇に消えた。僕もすぐ後に続く。そこはとても狭い廊下のようなだった。足元にうつすらと緑のライトがあるだけで後はほとんど闇だから、辺りの様子ははつきりとはわからない。女は中年とは思えない速さで闇の中を突き進む。靴の音だけが歪んだように響いていた。

突然女が立ち止まる。危なくぶつかりそうになったが、何とか体

勢を保った。女はドアの前に立っていた。そして向こう開きにドアを開いた。ドアの向こうはもっと深い闇だ。そして僕にかぎを握らせ先に進むように目で言った。僕は女の横をすり抜けてその闇の空間に足を踏み入れる。するとドアは音もなく閉まってしまった。僕は一人闇の中に取り残された。

「ちよつとー！」

僕はあせってドアを開けようとしたが、こちら側からは開ける事はできなかった。足元には先と同様に小さな緑のランプが取り付けられている。どうやら今度は階段になっているらしい。右側には壁、左側には下から吹き上げる風が絶え間なく頬をさらった。左側に壁は無いと、僕は直感で理解した。そして永遠に続くように思える階段を一步一步降りていく。手に汗がにじんでくる。壁も階段もコンクリート製らしく、特有の冷たさを右手に感じた。やがて遠くに行き止まりがぼんやりと見え始めた。あせらずに一段一段注意深く降りる。

たどり着くとそこにはまた同じようなドアがあった。

僕は携帯電話の明かりで例の鍵を鍵穴に差し込んだ。がちやりと音がする。注意深くそのドアをこちらに開いた。

そこにはいきなり白い服を着た男が立っていた。僕は驚きのあまり後ろに飛びのき、かかとを引っ掛けてしりもちをついた。とっさにつかまろうとした左手が空を切り、危うく左側に落っこちそうになった。危なかった。心臓はがたと壊れたように打ちつづけ、手にはびっしりと汗をかき、腋の下に冷たいものが幾筋も流れた。白い服の男はまるで僕の事など目に入らないように、まっすぐ前を向いて立っている。暗くて顔は良く見えない。

僕は震える足で何とか男の前に立つと男はリュックのようなものを差し出した。僕がそれを受け取り背負うと、不意に壁のスイッチを押した。

突然上からロープが降りてきた。上を見ても真っ暗でどこから繋がっているか解らない。男は僕にそれにつかまれと目で言った。僕

が両手でそのロープをつかむと男は僕の背中をいきなり押した。

「うわあああああああああ」

何もない左側の空間に突き落とされて僕は必死にロープにしがみついた。ロープは上で滑車になっていくからからと乾いた音を響かせる。もう、だめだ、死ぬかもしれない！と思った瞬間落下のスピードが緩み、難なく地面に足がついた。膝ががくがくして思うように歩けない。僕はそのままへたり込んだ。のどの奥が乾いて引っ付き、吐きそうだった。辺りはまだ闇だったが、左側に小さな緑のランプを見つけた。半ば這うように近寄ると、ドアだった。ノブを回すとかちやりと軽い音がした。鍵はかかってないらしい。僕は体をドアに預けてゆっくりとそれを開いた。

ごく平凡な明かりの中にごく平凡な若い女がそこに立っていた。「ちよつと遅いわね」と小声でつぶやきながら僕からリュックを受け取り、代わりに封筒を差し出した。「確認して」と言うので中を改めると3万円入っていた。彼女は手招きしてさらにもう一つのドアから僕を押し出した。「ご苦労様」それだけ言うと、ばたんとドアを閉めた。僕はイトーヨーカドー内の階段の踊り場にいた。館内放送が流れる。

「毎度御来店有り難うございます。只今、できたての『幻のパン』が入荷いたしました。極上の味をお試しください。地下食料品売り場パンのマーメイドにてお待ち申し上げます！」

僕はイトーヨーカドーを後にした。街は夕暮れの中にひっそりとその影を沈ませようとしている。僕は思い切り伸びをして、封筒をポケットにねじ込んだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0225a/>

日給3万円

2010年10月20日17時07分発行